

# ダニエル書 第38号

宝石の覆いを取り去る：ウィリアム・ミラーの預言的夢と真理の回復

Jeff Pippenger

2024-01-02

ミラーの夢の中で、見えない手によって小箱が彼のもとに送られてきた。夢の中で彼は、その小箱の寸法が「六インチ四方」と「十インチ」であると理解するよう導かれた。六の二乗に十を掛けると三百六十になり、これは預言上の一年の日数を表している。ミラーは、自分が宣べ伝えるべきメッセージを収めた小箱を与えられ、そのメッセージは、聖書預言において一日が一年を表すという原則に基づいていた。その小箱は聖書であり、ミラーにとって聖書は、聖書預言の「一日一年」の原則という尺度で見ると見るべきものだった。

神の御言葉には、それに伴って尊い宝箱を開ける鍵がある。開かれると私たちは満足し、喜ぶ。私は与えられる一筋一筋の光に感謝している。将来、今の私たちには非常に神秘的に思われる経験は解き明かされるだろう。いくつかの経験については、この死ぬべき身が不死を着るまで、私たちは決して完全に理解することはできないかもしれない。原稿集 第17巻 261頁

ミラーの夢の中で、棺には「鍵」が取り付けられており、それはミラーが用いるように導かれた方法論を象徴していた。

第三天使のメッセージを宣べ伝える働きに従事している人々は、ミラー師が採用したのと同じ方法で聖書を調べている。『預言と預言年代学に関する見解』と題する小冊子の中で、ミラー師は聖書研究と解釈のための、次のような簡単ではあるが理にかなった重要な規則を示している：

[規則1から5を引用。]

上記はこれらの規則の一部であり、私たちの聖書研究においては、ここで示された原則に留意するのがよいだろう。Review and Herald, 1884年11月25日。

ミラーが宝石箱を開けると、彼は「ありとあらゆる種類と大きさの宝石、ダイヤモンド、貴石、そしてあらゆる大きさと価値の金貨や銀貨が、宝石箱のそれぞれの場所に美しく並べられており、そうして並べられたそれらは、太陽にのみ匹敵する光と栄光を反射していた」と見いだした。

ミラーは、アドベンティズムの基礎的真理を構成する真理の宝石を見いだした。彼が見いだした真理は、完全な秩序で「並べられ」、太陽の光を反射していた。

そこでミラーは、その真理を「中央のテーブルの上に」置き、皆に「来て見よ」と呼びかけた。「来て見よ」は、黙示録で封印が開かれる場面から取られた象徴であり、ミラーは、1798年に封印が解かれたダニエル書のメッセージを悟る賢い者たちを表している。ミラーがテーブルの上に置いた真理は、ユダ族の獅子によって封印が解かれたダニエル書の真理であり、封印が解かれた時に生きていた世代を試すためのものであった。このため、最初の四つの封印に結びついた黙示録の四つの生き物とミラーは、その世代に向かっ

て「来て見よ」と呼びかけた。

そして、小羊が封印の一つを開いたとき、私は見た。また、あたかも雷の響きのように、四つの生き物の一つが「来て見よ」と言うのを聞いた。私は見た。すると見よ、白い馬。その上に座る者は弓を持ち、冠が彼に与えられ、彼は勝ち進み、さらに勝つために出て行った。彼が第二の封印を開いたとき、私は第二の生き物が「来て見よ」と言うのを聞いた。すると、赤い別の馬が出てきた。それに乗る者には、地から平和を取り去り、人々が互いに殺し合うようにする権威が与えられ、また彼には大きな剣が与えられた。彼が第三の封印を開いたとき、私は第三の生き物が「来て見よ」と言うのを聞いた。私は見た。すると見よ、黒い馬。その上に座る者は手に天秤を持っていた。すると私は、四つの生き物の真ん中からこういう声を聞いた。「小麦一量が一ペニー、大麦三量が一ペニー。油とぶどう酒を損なうな。」彼が第四の封印を開いたとき、私は第四の生き物の声が「来て見よ」と言うのを聞いた。私は見た。すると見よ、蒼ざめた馬。その上に座る者の名は死で、地獄が彼に従った。彼らには地の四分の一に対する権威が与えられ、剣と飢えと死と地の獣とによって人を殺すことが許された。ヨハネの黙示録 6:1-8。

ヨハネの黙示録において、七つの封印で封じられた巻物の封印を解いたのは、ユダ族の獅子として表されるキリストであった。また、ミラーが机の上に置いた宝石の封印を解いたのもユダ族の獅子で、すべての者に「来て、見よ」と宣言した。

彼が見いだした真理は、1843年のパイオニア図表において図解されており、それは主の御手によって導かれたものだとホワイト姉妹は語った。その御手は、ミラーに宝石で満たされた小箱をもたらした、同じ見えざる御手であった。1842年に作成された三百枚の図表は、「幻を書き記し、これを板に明瞭にせよ」というハバククの命にかなう成就であった。ミラーの部屋の中央に置かれたテーブルは、1842年と1843年にミラー派の使者たちが世界にもたらした三百の図表（板）を表していた。その図表は、1850年のパイオニア図表とともに、ハバクク書2章の「板」であった。

「『元来の信仰』の上に立っていたとき、再臨運動の講師たちと諸新聞の一致した証言は、あの図表の出版がハバクク2:2, 3の成就である、ということであった。もしその図表が預言の主題であったならば（そしてこれを否定する者たちは元来の信仰を離れるのであるが）、それに続いて、紀元前457年こそが2300日の起算年であったことになる。1843年が最初に公にされた時でなければならなかったのは、『その幻』が『なお遅れる』、すなわち、遅延の時があるためであり、その期間において、真夜中の叫びによって奮い起こされる直前、処女たちの一団は時に関するこの大いなる主題について、まどろみ、眠ることになっていたのである。」ジェームズ・ホワイト『Second Advent Review and Sabbath Herald』第1巻第2号。

のちにハバククの表に示されたメッセージ（宝石）に応じ始めた人々は、当初はわずかだったが、1840年8月11日に日を年とする原則が確認されると、人々は「群衆となるまでに増えた」。

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた。この出来事は予言を正確に成就した。それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが

採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた。学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から1844年にかけてその働きは急速に拡大した。『大論争』334、335。

すると群衆は宝石をかき回し始めた。その時点でミラーは、宝石の散乱を見て取る。「散らす」という語はレビ記二十六章の「七度」における主要な象徴の一つであり、ミラーは自分の夢の叙述の中で「散らす」という語のさまざまな形を十回用いている。「十」は試みの象徴であり、世の終わりが到来した人々への預言的な試験としてミラーの「散らされた」宝石の象徴的意味を正しく理解することを示すしるしである。

1863年、エリヤ（ミラー）によって提示されていたモーセの「散らし」の試験に彼らが失敗したため、ラオデキア的アドベンティズムが脇へ退けた最初の宝石は「七つの時」の宝石であった。その時点以降、宝石はますます散らされ、偽物と混ぜられ、ついには完全に覆い隠されることになった。尊い宝石の覆い隠しは、ついには宝石箱（聖書）そのものが破壊される場所にまで至ることになった。

ミラーの夢の中では、ミラーが「scatter」という語を用いた最初の「七回」と、彼がその語を用いた最後の三回とのあいだには、はっきりとした相違がある。彼が「scatter」を「七回」言及した後、彼は「まったく落胆して意気消沈し、座って泣いた」。

ユダ族の獅子として表されるキリストが、黙示録において七つの封印で封じられた巻物の封を解く働きを始める前に、ヨハネは泣いた。偽りの宝石によってその小箱（神の言葉）が埋もれてしまっていたことを悟ったとき、ヨハネとミラーは二人とも泣いた。

また、御座に座しておられる方の右の手に、内側にも外側にも書かれており、七つの封印で封じられた書物があるのを見た。私はまた、力ある天使が大声で宣言するのを見た。「だれがその書物を開き、その封印を解くにふさわしい者か」。しかし、天にも地にも地の下にも、その書物を開くことも、それを見ることもできる者は一人もいなかった。私は激しく泣いた。なぜなら、その書物を開いて読むにふさわしい者も、それを見る者も見いだされなかったからである。すると、長老の一人が私に言った。「泣くな。見よ、ユダ族の獅子、ダビデの根が勝利を得て、その書物を開き、その七つの封印を解くことができる。」ヨハネの黙示録 5:1-5

ミラーが発見して世に示した宝石に対する拒絶が高まっていき、聖書（宝石箱）が破壊されるに至ったとき、ミラーは涙を流した。

そのとき私は、彼らが本物の宝石や貨幣の中に、無数の偽物の宝石と偽造貨幣を紛れ込ませてばらまいているのを見た。私は彼らの卑劣な振る舞いと恩知らずぶりにひどく憤慨し、そのことを戒めて非難した。だが、私が戒めれば戒めるほど、彼らは本物の中に偽物の宝石と偽造貨幣をますますばらまいた。

そこで私は肉の心がかき乱され、腕力に訴えて彼らを部屋の外へ押し出し始めた。だが一つを押し出すそばから三つも入り込み、土や削り屑や砂やあらゆる種類のがらくたを持ち込んできて、本物の宝石やダイヤモンド、硬貨の一つ一つを覆い隠し、すべてを視界から追いやってしまった。彼らはまた私の宝石箱をずたずたに引き裂き、その破片をがらくたの中に撒き散らした。私の悲しみや怒りなど誰ひとり顧みる者はい

ないのだと思った。私はすっかり落胆し、意気消沈して、座り込んで泣いた。

彼の夢のこの時点で、「scatter」という語が「七回」用いられている。最後の三回は最初の七回とは区別されており、そのことによって七度の散らしに預言的なしるしが与えられ、レビ記26章の「七つの時」の象徴となっている。ミラーの第二の夢は、ネブカドネザルの第二の夢と同様に、「七つの時」を象徴的に指し示している。

黙示録5章のヨハネと同様に、ミラーが泣いたとき、ちり払いの男（ユダの部族の獅子）が「戸を開けて」部屋に入って来た。誰も開くことのできない七つの封印で封じられ、ヨハネを泣かせたその書を父なる神が手にしておられるという視覚的描写は、第4章1節から始まる。

この後、私は見た。すると、見よ、天に一つの門が開いていた。私が最初に聞いた声はラッパのようで、私にこう語った。「ここへ上って来なさい。私はこの後必ず起こることをあなたに示そう。」黙示録 4:1

ミラーは泣き、扉が開くのを見た。「私はこのように泣き、自分の大いなる損失と責任を嘆き悲しんでいるうちに、神を思い起こし、助けを送ってくださるよう切に祈った。するとすぐに扉が開き、一人の男が部屋に入ってきた。そのとたん人々は皆そこを去り、その男は手にちり払いのブラシを持って窓を開け、部屋のちりやごみを払い始めた。」ユダ族の獅子とちり払いの男は、ヨハネとミラーが泣いたとき、開いた戸口に現れた。扉が開くことは、経綸の転換の象徴である。

ミラーと同様に、彼は泣き、扉が開かれた。しかし彼はまた祈った。「私はすっかり落胆し、意気消沈して、腰を下ろして泣いた。このようにして自らの大きな損失と責任を嘆きながら涙に暮れていると、神を思い起こし、助けを送ってくださるよう切に祈った。するとすぐに扉が開き、一人の男が部屋に入ってきて、そこにいた人々は皆出て行った。彼は手にちり払い用の刷毛を持ち、窓を開け、部屋の塵やごみを払い始めた。」

終末時代の歴史における道しるべとなる祈りは、二章でダニエルと三人の勇士によって示され、また九章でもダニエルによって示された祈りである。これは、「散らされていた」ことに気づいたときに黙示録11章の二人の証人が祈るべき、「七たび」に関わるレビ記26章の祈りである。二人の証人は、モーセの呪いの成就として自分が「散らされた」ことを悟ったとき、九章でダニエルが行ったことを繰り返すことになる。二人の証人はまた、彼の宝石が「七たび」散らされるに至ったとき、夢の中でミラーが示したことを繰り返すことになる。

その祈りに印が付けられると、扉が開き、塵払いの男がやって来た。部屋は空っぽだった。邪悪な群衆はいなくなり、新しい経綸が到来した。そのとき、手に箕を持つユダ族の獅子が、「窓を開け、部屋の塵やがらくたを掃き始め」、そして「彼が塵やがらくたを掃くと、偽の宝石や贗金までもが、雲のように舞い上がって窓から出て行き、風がそれらを運び去った。」

開かれた窓はまた、分かれ目を示している。というのも、ごみが窓から運び出される一方で、マラキ書に見いだされる、終わりの日の「祭司」たちに対して「すべての十分の一を倉に携えて来て、わたしの家に食物があるようにせよ。万軍の主は言う。これによって

今、わたしを試してみよ。わたしがあなたがたのために天の窓を開き、受けきれないほどの祝福を注がないかどうかを」と命じるその戒めを果たした者たちがいるからである。開かれた戸と開かれた窓は、悪しき祭司が退けられ、義なる祭司が祝福されている時に成就する、経緯の変化を表している。

ごみを掃く男が床を清め始めると、ミラーは一瞬目を閉じた。「騒ぎの中で私は一瞬目を閉じた。目を開けると、がらくたはすっかり消えていた。貴重な宝石、ダイヤモンド、金貨や銀貨が、部屋じゅうにあふれるほど散らばっていた。」そのとき、貴いものと卑しいものは完全に分けられた。

そのとき、より大きな小箱が机の上に置かれ、散らばっていた宝石はその中に投げ入れられた。「それから彼は、先のものよりはるかに大きく、いっそう美しい小箱を机の上に置き、宝石、ダイヤモンド、硬貨を一握りごとにかき集めてはその小箱に投げ入れ、ダイヤモンドの中には針の先ほどの大きさもないものもあったが、一つ残らず入れ終えるまで続けた。」その後、ミラーの根本的な真理は聖書だけでなく「預言の霊」とも結び合わされ、それらの真理は当初よりもいっそう美しく、いっそう輝かしくなった。

1798年に封印が解かれたメッセージの観点からウライ川の幻を評価するにあたっては、そうした真理のいくつかはミラーに与えられた枠組みによって限定されていたことを理解しておくべきである。また、それゆえ、それらの真理の一部は、見かけ上は小さく些末に見えるとしても、より大きく、より美しいものになると期待される。

真理が回復されると、それらはより大きな箱に入れられ、そして再び、「来て見よ」との呼びかけが、ミラーではなくキリスト（ちりを払う人、ユダ族の獅子）によってなされる。これは封印がいままさに解かれたことを示しており、最後の封印が解かれることとは、猶予期間が閉じられる直前に起こるイエス・キリストの黙示のことである。あるいはホワイト姉妹の言うところでは、ちりを払う人が入って来たときである。

「私は小箱の中をのぞいたが、その光景に目がくらんだ。それらは以前の栄光の十倍の輝きで光っていた。私は、それらが、ちりの中にそれらをまき散らし踏みにじったあの邪悪な者たちの足によって、砂で磨り減らされてしまったのだと思っていた。小箱の中には美しい秩序で整然と並べられ、一つ一つがそれぞれの場所にあり、それらを投げ入れた男の目に見えるような苦勞の跡は少しもなかった。私はあまりの喜びに叫び声を上げ、その叫びで目が覚めた。」初期の著作、83。

遅延の時期と第一の失望は2020年7月18日に到来し、2023年7月以来、ユダ族の獅子がイエス・キリストの黙示のメッセージの封印を解いておられます。その封印を解く働きにはダニエル書も含まれており、次の記事でミラーの夢の考察を締めくくります。

塵払いの人の働きは「賢い祭司たち」と協働して行われる。その「祭司たち」は黙示録十一章の二人の証人であり、エゼキエル書三十七章のよみがえらされた死んだ骨でもあるが、彼らの働きはまた神の言葉のほかのラインによっても表されている。私たちは、ウィリアム・ミラーの第二の夢に関して私たちが特定したことの第二の証人として、それらのラインのいくつかを用いる。

「聖書は、私たちが義についての教えを受けられるよう、私たちの益のために与えられている。尊い光の光線は誤りの雲に覆い隠されてきたが、キリストは誤りと迷信の霧を一掃し、父の栄光の輝きを私たちに明らかにしてくださる用意ができている。そうして私たちは、弟子たちが言ったように、『道すがら、彼が私たちに語っておられたとき、私たちの心は内で燃えていたではないか』と言うのである。」出版伝道、68.